

# TRHO Racing

## 2022 MFJ全日本ロードレース選手権シリーズ 第8戦 第54回MFJグランプリSUPERBIKE RACE in SUZUKA Race Report

最後まで攻めの走りを見せた國峰啄磨  
清成龍一が2回3位表彰台に上がる  
國川浩道は満身創痍ながらポイントを獲得



2ST1000

#29 國峰啄磨

予選 P.P. ( タイム : 2分08秒106 ) 決勝 : 2位

シリーズランキング : 2位

#31 國川浩道

予選12番手 ( タイム : 2分 1 1 秒341 ) 決勝 : 1 4 位

シリーズランキング : 10位

JSB1000

#3 清成龍一

RACE 1 : 予選7番手 ( タイム : 2分06秒761 ) 決勝 : 3位

RACE 2 : 予選3番手 ( タイム : 2分06秒734 ) 決勝 : 3位

RACE 3 : 予選8番手 ( タイム : 2分06秒756 ) 決勝 : 10位

シリーズランキング : 10位



2022年シーズンの全日本ロードレース選手権は、三重県・鈴鹿サーキットで最終戦を迎えた。MFJグランプリと冠された今回のレースは、通常より3ポイント多く与えられる。またJSB1000クラスは、初めて3レース制で行われた。事前テストはなく、木曜日の特別スポーツ走行からレースウィークは始まった。今回は日曜日まで好天に恵まれ、安定したコンディションのもとで行われた。

ST1000クラスの國峰琢磨は、渡辺選手と同ポイントで最終戦に挑んだ。前でゴールした方がチャンピオンとシンプルな状況だけに、とにかく勝つことに集中していった。JSB1000クラスの清成龍一も走り始めからフィーリングはよく、いいレースをしてシーズンを締めくくりたいところだった。

一方、ST1000クラスの國川浩道は、10月8日にモトクロストレーニングの際に転倒。1月にも負傷した右腕を、またも骨折してしまう。レースまで2週間前となる18日にプレートを入れる手術を行い抜糸が搬入日だったが本人の強い希望もあり出場を決めていた。まずは、どれだけ走れるかを見て、レースに耐えられるかを判断することになっていたが、2分15秒台からスタートし、予選では2分11秒台までタ

イムを縮めていった。

國峰は予選セッション開始早々にタイムアタックに入ると、本人もビックリする2分08秒108をマーク。コースレコードを大幅に更新し、ポールポジションを獲得する。清成は、2分06秒台に入れ8番手につけ、セカンドタイムでは7番手につけていた。

ST1000クラスは12周で争われた。國峰は、好スタートを切り、1コーナーは2番手だったが、2コーナーではトップに浮上する。そのままレースをリードしていきたくはあったが、ヘアピンでややはらんだところを南本選手に抜かれオープニングラップは、2番手で戻ってくる。高橋選手、そして渡辺選手が続きトップグループは4台が形成。渡辺選手が背後に迫ってくると何度か抜きつ抜かれつを繰り返す。

そしてレースが動いたのが折り返しを過ぎた7周目だった。バックストレートで渡辺選手が一気にトップに出ると、國峰も2番手に浮上。トップを走る渡辺選手に挑んでいく。9周目の1コーナーでインを突くが、2コーナーでは渡辺選手が、S字コーナーでは國峰が前へとレース終盤を迎えヒートアップする。



しかし130Rで渡辺選手にかわされると、続くシケインでは高橋選手にもパスされてしまい3番手に下がってしまう。何とか高橋選手を抜きたいところだったが、勝負を仕掛けられないまま、最終ラップを迎える。高橋選手をかわせないまま、東コースから西コースに入るとスプーンカーブ立ち上がりで高橋選手がグラベルにタイヤを落とすと失速。これを見逃さず2番手に上がると、渡辺選手のテールを追う。そして最後の勝負所であるシケインでのブレーキングに入っていくが…。2位フィニッシュとなり、惜しくもチャンピオンには届かなかったが全力を尽くしただけに胸を張る結果となった。

國川は集団をリードするが、レース中盤以降はペースを上げることができず単独走行となる。それでも14位でゴールし、ポイントを獲得してシーズンを締めくくった。

土曜日に行われたJSB1000クラスのレース1は20周で争われた。清成は6番手で1コーナーに入っていくと序盤は、そのポジションをキープ。7日目にはセカンドグループとなっていた3番手争いの前に出るとトップ争いを繰り広げる渡辺選手と中須賀選手に迫っていく。レース終盤には、失速した渡辺選手に接近するがかわすことはできずゴール。それでも3位に入賞し、今シーズン初表彰台に上がった。

レース2のグリッドはレース1のベストラップで決まり、清成は3番手とフロントロウにつけた。そして絶妙なスタートを切りホールショットを奪うとレースをリード。レース2は12周と周回数が短いだけに短期決戦となっていた。トップをキープしていた清成だったが、4周目のスプーンカーブ立ち上がりでリアがスライドし、やや加速が鈍ったところを中須賀選手にかわされ2番手。6日目には渡辺選手にもかわされ3番手に下がる。後方から追い上げてきた集団に飲み込まれる形となる。

4台の3位争いとなり、一時は5番手に下がるが8周目に4番手に上がると、ヤマハファクトリーの岡本選手を追う。そして11周目の1コーナーで岡本選手が転倒したため3番手に浮上。そのまま3位でチェッカーフラッグを受け2戦連続で表彰台に上がった。

レース3は、コンディションの変化に対応できなかったのか、マシンフィーリングが変わってしまいペースを上げることができず10位と最後に悔しい結果となったが、レース1、レース2で表彰台に上がり存在感をアピール。清成のケガから始まった2022年シーズン。鈴鹿8耐での5位入賞も課題が残ったが、全日本での國川の躍進、國川の意地、そして復調してきた清成とノビしろだらけのTOHO Racingの2023年シーズンのご期待ください。





# TOHO Racing

## 清成龍一 JSB1000ライダー

「初日からタイムは出ていませんでしたが、ウイークの流れはよかったですね。フィーリングはすごくよく、一発タイムは出ていなくても、オートポリス、岡山に比べると、いいレースができる手応えがありました。ただ、表彰台に上がれるとは、全く予想していませんでしたが、2回も乗ることができました。ただ、締めくくりとなるレース3が不甲斐なかったのが残念でした。今シーズンはケガに始まり、鈴鹿8耐でようやく復帰できましたが、チームが寄り添ってくれたおかげで走ることができました。福間代表やチームを始め、支えてくださった皆さんには本当に感謝しかありません。ありがとうございました」



## 國峰啄磨 ST1000ライダー

「最終戦の結果はとにかく悔しいですが、これが実力だと思います。渡辺選手と高橋選手とバトルができたことは、いい経験になりました。レースウイークに入ってから、走る度によくなっていましたし、予選では自分自身でもビックリするタイムを出すことができました。ルーキーイヤーでここまで走れたのは、今まで支えてくださった福間代表を始めチームのおかげです。さらに速く強いライダーになれるように、これからも努力していこうと思っています。多くの応援ありがとうございました」

## 國川浩道 ST1000ライダー

「2週間前に手術をしたので走ってみて判断するというわがままを言わせてもらいました。これがシーズン序盤なら欠場していたかもしれませんが、最終戦ということで、1年の集大成として、どうしても走りたい気持ちが強かったです。走って見ると厳しい状況ながら意外と乗ることができ、走る度にタイムも縮まっていきました。レースを何とか走り切ることができたのは、メカニックのおかげですし、なにより参戦を許可してくださった福間代表に感謝いたします。14位とはいえポイントを獲ってシーズンを終えられたことは糧になると思います。1年間応援ありがとうございました」



## 戸井田剛 JSB1000チーフメカニック

「清成選手が頑張って2度表彰台に上がってくれたので、いい最終戦になりました。シーズン開幕前のケガから鈴鹿8耐で復帰しましたが、スプリント仕様は第6戦オートポリスから作り始めた状態でした。岡山を経て、今回の鈴鹿にターゲットを絞ってきましたが、まだまだ満足できるレベルではないと思います。いい材料が見つかった最終戦でしたし、やっとスタートラインに立てた感じです。國峰選手は結果的にタイトルを獲れませんでした。1000cc1年目で健闘したと思います。今までになかった強さも感じられましたし、いいレースでした。國川選手もケガを押しての出場でしたが走り切ってポイントも獲れたので、よかったですと思います」

## 福間勇二 チーム監督・代表

「清成のケガに始まった2022年シーズンですが、チームとしても様々なことがあり、鈴鹿8耐でようやくまとまってきました。最終戦では清成がトップを走り表彰台を2度獲得。國峰は惜しくもチャンピオンにはなれませんでした。最後まで攻めの走りを見せ成長を感じさせました。國川は最後までケガをしてしまいましたが、本人の意向も尊重し出場させました。多くの課題が残っている状態ですが、まだまだ成長できるということです。支えてくださったスポンサー、サプライヤー、ファンの皆さん、本当にありがとうございました。皆さんのおかげでTOHO Racingは成長できています。来シーズンも楽しんでいただけるよう、しっかり準備していきます」

